



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
<http://www.kokubunken.or.jp/>
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

安倍晋三元首相の急逝を悼む

理事長 小柳志乃夫

安倍晋三元首相が兇弾に斃れた。軍事膨張する中国への対処はいふに及ばず、国家の根幹に関はる皇位継承を巡っても解決すべき課題を抱へる今の我が国にとって、かけがへのない指導者であった。ご本人が如何に悔しかったことかと思はれてならない。謹んでご冥福をお祈り申し上げたい。

その後、特別番組が続いてゐるが、安倍氏の人物の大きさと魅力を改めて知ることが多かった。

青山繁晴議員は潰瘍性大腸炎といふ難病との長年の付き合ひが、人の痛みの分る思ひやりのある日本男児に育てたと語つてゐた。

TPP交渉の衝に当つた甘利明元経済再生相によれば、ワシントンでの交渉時、米通商代表の態度に激怒して交渉団全員で席を立つて大使館に引き揚げた際に、沈痛な思ひのまま東京の官邸に電話報告したところ、首相は「それでい

いのだ」と甘利氏の対応を全面的に肯定してくれたといふ。このひと言に交渉団は元氣を得て、それから交渉は進展したといふ。甘利氏はこの人についてきて間違ひなかつたと確信したと語つてゐた。長年の盟友である菅義偉前総理は、安倍元首相の重篤との報道に接して、すぐに奈良県立医大病院にかけつけた理由を問はれて、「同じ空気を吸ひたかつた、寂しがり屋なのでお側にゐてあげたかつた」と静かに胸中を吐露されてゐた。そこには深い魂のつながりが偲ばれて、その真情が胸にしみた。国政の中心にかうした「信の世界」が生きてゐたことを知らされた。これらは、率直で明朗で前向きな生前の印象と重なつて、安倍氏の政治姿勢の根本に、「人の和」を大切にして、人生を強く正しく生きていくといふ、ごく真つ当な思想が生きてゐたことを示してゐ

ると思ふ。それは、日本人が大切にしてきた生き方であり、国の在り方でもあつた。

政治評論家の田崎史郎氏は安倍政権の最大の成果は、平和安全法制の成立であつたと評してゐた。集団的自衛権を容認する平和安全法制は日米同盟の基本に關はる問題であつたが、左翼勢力からは戦争法案と呼ばれて国会周辺を埋め尽くす大規模行動の騒ぎも起きた。だが、安倍氏は揺るがぬ信念をもつて法案を成立させた。

この頃、外務省OBの岡崎久彦氏は、次の七言絶句の漢詩を作つて、安倍首相に贈つたといふ。

曠古の敗戦、久しく志を奪ふ
誰に託さん、民族安危の事
父子三代、憂国の情

遂に顕はす、集団自衛の義を

(読み下しは筆者)

(筆者なりに意味を取ると、「わが国未曾有の敗戦に、日本国民の志は長い間奪はれてしまった。日本民族の安全保障の舵取りは誰に託せばよいのか。ここに、岸信介、安倍晋太郎、安倍晋三の三代にわたる憂国の情が、遂に、集団的自衛権の行使の現実的な意義を世に明らかにしたのだ」となる)

安倍氏は岡崎氏の激励に力を得たことだらうし、昭和三十五年の六〇年安保騒動の中にあつて、改定条約を通した祖父の志の継承を

も確かめられたことだらう。

安倍氏の努力によつて、国際政治における日本に対する信頼は厚くなつた。しかし、国内に目を転ずると、「戦後レジームからの脱却」「日本を取り戻す」といふ途は半ばである。それどころか、憲法解釈を変へて集団的自衛権行使を可能としたことで、一部には根強い「反安倍」の動きが存在する。かうした護憲左派ともいふべき人達は、安倍氏逝去に寄せられた国外からの弔意をどう見てゐるのだろうか。その弔意は、安倍氏が国際政治の舞台で示した見識の確さとその人柄に対する信頼とを物語るもの以外の何物でもない。

国際政治の現実を見ずに、自国の歴史への愛情をも抱かない日本人を、「日本国憲法前文の世界」に閉ぢこもつてゐるやうな日本人を海外の人たちは決して評価するまい。それは、安倍氏が自らの死を以て示してくれた真実である。

わが国を取り巻く環境は激変してゐる。その上に、安倍氏といふ軸を失つて政治的にも大きな動きが起きうるだらう。しかし、安倍氏が示したやうに、日本人本来の生き方を取り戻して現在を生き、次代に伝へていくといふ基本を見据えて、前進していききたいと思ふ。